「茶旅」
“こぼればなし“

(7) 沖縄と福州 さんぴん茶の由来

コラムニスト　須賀　努

昔は東京から沖縄へ行くというと実に遠いところに思えた。時間的にもかかるし、何より飛行機代が高かった。だが最近はLCCの登場で、沖縄旅行が格段に行き易くなっている。筆者もここ3年、毎年沖縄を訪れている一番の要因はここにある。そして同時に沖縄に東南アジアを感じることが多く、文化的な比較を楽しんでいる。

沖縄の人に『どんなお茶を飲んでいるのか』と聞くと、『さんぴん茶』という答えが返ってくる。確かにペットボトルを中心に、至る所でさんぴん茶に出会う。だが『この茶を何故さんぴん茶というのか』と聞いて、答えてくれた人は一人もいなかった。このお茶が中国から来たもので、ジャスミン茶である、という人はいたが、名前の由来が分からない。筆者は香港に長く滞在したので、『さんぴん』が『香片』から来ていることが直ぐに分かった。飲んでみればジャスミンであることに異論はない。念のため、福建省出身の中国人に確認すると福州語では『ションピン』とか『サンピン』と発音するよ、という回答を得て確信した。さんぴん茶は中国の福州から来たジャスミン茶のことであった。

そう考えると沖縄、昔の琉球王国と中国大陸の関係に思いが至る。琉球は中国の明・清の王朝に朝貢する関係にあり、その窓口が福州だったのだ。現在往時の交易拠点だった琉球館が福州市内に再建されており、明治期に一時沖縄出身者がここで茶工場を営んでいたとの話も出てきた。琉球を実質的に支配していた薩摩にはこのさんぴん茶は入らなかったのだろうか。次回鹿児島を訪ねて聞いてみたいところだ。

中国には、特に福建省には緑茶、烏龍茶、紅茶、白茶などお茶の種類は沢山ある。福州は最近は白茶の産地として名高いのだが、なぜ沖縄にさんぴん茶が運ばれてきたのだろうか。この疑問を解くために、福州へ行ってみた。そして政府の農業関係者や茶業者から『福州は中国最大のジャスミン茶の産地』との説明を聞き、合点がいった。

但し中国語ではジャスミン茶に2つの言い方がある。『茉莉花茶』と『香片茶』、これは一体どう違うのだろうか。福州で話を聞いていると、中国ではこの2つを明確に区別している。それは等級の違いだというのだ。『茉莉花茶』は高級品、『香片茶』は低級品

(5-6等級)だった。高級な茉莉花茶を作るためには、まず春に高級な緑茶を作り、そして高級ジャスミンの花が咲く7月頃を待ち、この原料を合わせて練り込み、作り出されるという。現在では手っ取り早く金儲けをする風潮が蔓延し、このように半年もの時間と労力がかかるお茶の生産者は減少傾向だと、関係者は嘆いていた。

写真：福州市の専門家から話を聞く

福州郊外の北峰という場所で、茉莉花茶に使われる緑茶を生産しているというので訪ねてみた。そこで出された緑茶を飲んでみると、驚くほど上質で、すっきりした味わいであった。『高級緑茶はそのまま緑茶として高値で愛好者に売ってしまうため、殆ど市場には出ない。茉莉花茶を作るのはその次のレベル』だとか。そして今や、この辺で低級な香片茶を作る人はいない、とも。ではどこで作られているのかと聞くと、広西壮族自治区の横県あたりかなと言われてしまう。

清末にはあの西太后にも愛されたと言われている薫り高い茉莉花茶、以前は100%福州で作られていたが、現在では広西、四川などでも作られている。そして消費地は北京、天津、大連、青島など中国の北部が主流となっている。そして香片茶は香港など南方に消費ニーズがある。

福州から琉球への香片茶の輸出はいつ頃から始まったのかは、確認できなかった。日本への茉莉花茶の輸出は1849年の統計ではゼロだったが、1867年から輸出量が確認されており、その後増加していた。この統計の中で、茉莉花茶に香片が含まれていたのか、琉球は日本に含まれていたのか、途中から日本に編入されたのかは、全く不明。

いずれにしても、琉球に高級な茉莉花茶ではなく、香片が輸出されたのは、中国から見た、琉球の位置づけとも関連がありそうだ。更には福州あたりから多くの中国人が琉球に移住し、官僚などの職に就いたと言われており、彼らが日常飲むお茶として、香片が持ち込まれた、との説も聞いた。それにしてもなぜ今でも沖縄ではさんぴん茶が飲まれ続けているのか。沖縄の気候に合っていたのか、正直尋ね歩いている内に、どんどん疑問が膨らんでくるお茶だった。

（すが　つとむ）